

状況への散歩

常識から考える

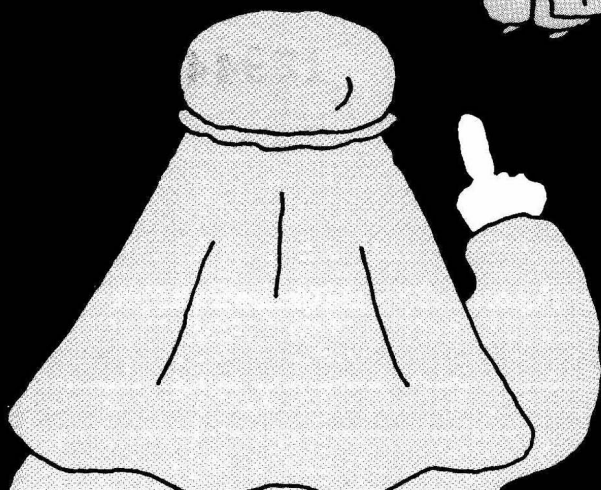
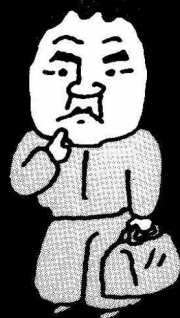


小田実エッセイ集

状況への散歩

常識から考える

由実エッセイ集



おだ まこと
小田 実

1932年、大阪市に生まれる

現在一作家

著書—小説に「アメリカ」「現代史」「冷え物」

「円いひっぴい」「風河」(以上、河出書房
新社),「ガ島」「HIROSHIMA」「列入
列景」「海冥」(以上、講談社)など,

評論に「タコを揚げる」「『共生』への原
理」「状況と原理」「長崎にて」(以上、筑
摩書房),「状況から」「世直しの倫理と論
理」(以上)、『民』の論理、『軍』の論理
『ベトナム以後』を歩く」(以上、岩波書
店)など多数。

状況への散歩——常識から考える

1984年11月10日 第1版第1刷発行

著 者 小 田 実

発 行 者 大 石 進

発 行 所 株式会社 日本評論社

東京都新宿区須賀町14番地
郵便番号 160 電話 東京 341—6161(代表)
振替 東京 0—16番

印 刷 株式会社 金羊社 製 本 稲村製本

状況への散歩

常識から考える

小田実エッセイ集

はじめに

私は散歩するのが好きだ。趣味は何んですかと聞かれると、旅と散歩、そんなふうに答えることにしている。

散歩が好きだと言っても、静かな田園を歩くのが好きというのではない。べつにそちらがコンリンザイきらいというのでもないが、やはり、街なか、人なかを歩くのが性にあっている。

街なか、人なかをぶらぶら歩いていると、犬も歩けば棒にあたる、で、いくらでもぶつかって来るものがある。べつにこちらからぶつかろうとしてぶつかるのではない。そのつもりもないのに、いやおうなしにぶつかって来る。逆に言うと、それが街なか、人なかのありようというものである。

そういう散歩のつもりで書いたエッセイが、この本の中身だ。散歩だから、こちらからぶつかろうとしているのではない。しかし、世の中のもろもろ、政治というややこしいもののもろもろ、好むと好まざるとにかかわらず、先方様からぶつかって来る。それが街なか、人なか、それをさ

らに大きくしての世のなかというものの本質だろう。

気楽に書いたエッセイである。肩ヒジを怒らせておらびあげているつもりはない。読者諸君、まあ、気楽に読んでくれたまえ。それこそ散歩のみぎり、どこか街のベンチの上でも読んでくれたまえ。ただ、そのベンチの上にまで、ぶつかって来るものがある。そこから眼をそらせてしまえば、かえって散歩ではあるまい。そのつもりで書いたエッセイがこの本だ。

目次

はじめに

PART 1

「非軍事」国家日本の構想へ——基本にある「非武装非同盟」—— 3

裁判を民衆の手に取り戻すこと——「民衆法廷」の原理と実行 22

日本人と朝鮮人——あるいは、主体と連帯 42

PART 2
常識から考える——天皇の戦争責任について 57

タダの岩の上で——議会政治を考える 64

日本人と宗教——専門家でない立場から 72

だから、こわい——最高裁の人権感覚 79

基本になること——防衛問題を考える 86

「日本体制」の秘密——内閣はよし短命なれど官僚は永遠だ 93

家族を一度否定してみないか——あえて言えば諸悪の根源としての家庭 101

せめて名札をつけよ、それから人権を語れ——民主主義の基本を考える 108

つきあいの基本としての教育——教育におけるイデオロギー性 116

あなたはほんとうに日本人か？——「会社国」日本万歳／	123
「勝ち負け」の論理、倫理の外へ——せめてもの基本の視点	133
二つともこわい——「日本の検察」	140
これでさらに……——教科書問題の本質	147
かのように——視点の問題から	154
世界のさきゆき——未知数のなかで見えていること	163
「情報公開」とともに——無名性と無責任性	171
ある「田舎弁護士」の話——「私的」な回想	179
「五族協和」と中曽根氏——「革新官僚」の道	187
平和と「生き地獄」——「核なき核戦争」を考える	195
「冤罪」ということばを聞くと——基本の問題いくつか	204
超秀才とただの秀才の話——彼らと私	212
法律が眼に見えない——女性と法律	220
おしまいに	

装幀 集合 d e n
イラスト 五辻 盈

P A R T I

「非軍事」 国家日本の構想へ

● 基本にある「非武装非同盟」

1

スイスという亡霊が私たちにはまとわりつづけて来ている。

スイスという国は生きて、いる国なので、このことばを使うのにはいささかためらいはあるが、そのとり憑き方はどうにも亡霊的だ。べつにユングフラウやレマン湖の白鳥にかかわっての話ではない。「非武装中立」にかかわってのことだ。この元来は私たちの国日本の「国是」であるはずの原理に、スイスが亡霊となつてとり憑いている。それでことが面倒になっている。

2

「あの永世中立国のスイスだって、自衛のための軍備は持っている。国民は銃をもつてたたかう

覚悟ができてゐる。あれは決して非武装国家ではない。それどころか国民皆兵、国民総武装の国だ。」

そこから話は始まって、軍備の放棄、戦争の放棄などというアホなことは、軍備を持つのがすべての国の現状である現代世界に通用するはずがない。スイスの例が示す通り、「中立」をまっとうするためにまさに軍備がいる。外敵の侵略にそなえて自衛力が必要だ。しかるに、わが日本では、まだ「非武装中立」などとわめきたてているバカがいる。――

あとは一瀉千里である。

「外敵の侵略にそなえて」となれば、いったい、誰が外敵かが当然問題になる。「外敵」がいったん決まれば、その大きさ、位置の評価によって、必要な自衛力の大きさはいかようにも規定できる。つまり、大きければ大きいほどよい。そのほうが安全である。すくなくとも、安全であるという錯覚は生み出し得る。そして、そのほうが産業に活気がつく。すくなくとも、そうした錯覚は生み出し得る。

「外敵」が大きすぎて自国一国では手におえない。その「外敵」に対抗し得るほど大きな国と軍事同盟を結ばないとやっていけない。いや、もっと大きくその大国をカナメとした集団保障の環のなかに入れ。

――と、ことは進む。「中立」をまっとうしようとした話が、いつのまにか「中立」の否定と

なつて終る。

3

私たち、今、もう少し「中立」を原理的に考えておかななくてはならないところに来ているようだ。政策的にだけとらえていると、スイスの亡霊にしてやられる。まず、日本に「中立」——「永世中立」を原理的に必然にする理由があるのかだ。そこまで踏み込んで考えておきたい。おくことが必要だと私は思う。

まず考えたいのは、かつての戦争において、ほとんど全世界が日本を「敵」としていた事実だ。もちろん、なかには、中南米諸国のように、アメリカ合州国というその地域の「支配者」の圧力の下に日本に「宣戦布告」していた国もあった。しかし、事実として、ほとんど全世界が日本を「敵」としていた事態は否定しがたい。

そして、ここでまず言っておかなければならないのは、日本が理不尽に「敵」とされたのではないという事実だ。こんな判りきったことを今言っておかなければならないのは、理不尽に「敵」とされたというたぐいの議論の展開さえ見られるのが今の世のさまだからだ。まず、日本の他国、他民族を攻め、殺し、焼くのが過去の過去があった。この過去は、他の国もやっていたことだからと言って帳消しになることではない。このごろはやりの論調にそういうものもあるが、他人の犯罪は

自分の犯罪を免責することにはならない。他人が泥棒したと言って、自分の泥棒が無罪になるわけではないのだ。まして、自分によってさんざんな目にあわされた人間の眼からことを見たらどうなるのだろうか。他の人も他の悪いやつによってやられているから、我慢しろというのか。

全世界によって「敵」とされた日本の世界への復帰は、まず、攻め、殺し、焼いた過去を清算することを当然の前提としていた。清算は、そういう過去を二度とくり返さないことを誓い、実際に誓いを実行すること以外にはない。その上で、同じような過去を持つ他者を批判し、改善を迫る立場に立ち得る。「憲法前文」には、日本の決意、態度がよく示されている。この決意、態度は「非武装」、戦争の放棄を必然にする。

世界の誰によっても「敵」とされた国の世界復帰は、もうひとつ、世界の誰とも仲よくすることを私たちに求める。この決意、態度も「憲法前文」がよく示していることだが、これは他人のケンカには加わらないのを必然にすることでもある。つまり、「中立」——「永世中立」がここで当然の選択だ。

4

ただ、この「中立」には弱いところがあった。その弱さがはっきりして来たのが、今のありようでないかと思う。そこで、スイスの亡霊にしてやられて、「中立」に内在する弱点から「非武

装」が侵蝕されて来た——と、ことの次第を見ることもできる。

弱いところは、大きく言って、二つあったと思う。ひとつが、現実の世界状況にかかわる弱点なら、もうひとつはそこにからみながらの原理的弱点だ。

前者から考えてみよう。

まず、「中立」——「永世中立」を標榜するのはいい。しかし、問題は世界がそれを認めるかどうかということだ。

いや、世界というような抽象的な言い方はよくない。アメリカ合州国とソビエトという対立する二超大国がそれを認めるかどうか——これが当然問題になる。

ここで、ひとつは、日本はスイスとちがうという話になる。まず、経済大国である。スイスなどというちっぽけな時計しかできない国とちがって、どちらの超大国も、それを欲しがる。それから、日本の場合、ついおとなりがソビエトだ。地理的環境がちがう、いや、こういう場合、地政学的環境と言ったほうがいいのか。

面白いのは、スイスのように小国とちがって経済大国だから、攻めにくいということには議論がならないことだ。常識から言って、小国より大国のほうが侵略しにくいし、支配統治しにくいにきまっている。グレナダを攻め、「制圧」するのは簡単だが、かつてイギリスはインド統治にさんざん手を焼いた。今、アメリカの「植民地支配」に苦しむミクロネシアのある活動家が私に